第１７回定例岡山県教育委員会議事録

１　日　　時　　令和６年１月１９日（金）
　　開会１４時１５分　　閉会１５時１７分

２　場　　所　　教育委員室

３　出　席　者

教育長		鍵本　芳明
委員（教育長職務代理者）		田野　美佐
委員（教育長職務代理者）		梶谷　俊介
委員		松田　欣也
委員		上地　玲子
委員		服部　俊也
教育次長		國重　良樹
教育次長		田中　秀和
学校教育推進監		中村　正芳
教育政策課	課長	小林　伸明
	副課長	中江　岳
	総括主幹	石﨑　貴史
財務課	課長	朝倉　尉雄
教職員課	課長	鈴鹿　貴久
高校教育課	課長	鶴海　尚也
教育情報化推進室	室長	宮森　久彰

４　傍聴の状況　　０名

５　附議事項
　（１）　公立学校教職員の懲戒処分について

６　協議事項
　（１）　ＧＩＧＡスクール構想の推進に伴う１人１台端末等の整備等について
　（２）　令和６年度２月岡山県議会定例会主要事項について（条例制定）
　（３）　令和５年度２月補正予算について
　（４）　使用料及び手数料の改定（案）について

７　報告事項

（１）　災害時学校支援チームおかやまの派遣について

（２）　高校生国際会議の開催について

８　その他

９　議事の大要

開会

非公開案件の採決

（教育長）

本件議題に入る前に、議題の公開の可否について決定したい。附議事項（１）は人事案件であるため、協議事項（１）（２）（３）（４）は議会との調整を要するため、教育委員会会議規則第１２条に基づき、非公開とするよう発議する。

委員から議題を非公開とする発議はないか。

（委員全員）

（特になし）

（教育長）

この発議は、討論を行わずにその可否を決定することとなっているので、直ちに採決に入る。附議事項（１）協議事項（１）（２）（３）（４）は非公開とすることに賛成の委員は挙手願う。

（委員全員）

挙　手

（教育長）

全会一致により本案件は非公開とすることに決した。

報告事項（１）災害時学校支援チームおかやまの派遣について

〇教育政策課長より一括説明

（委員）

支援チームの派遣については、報道発表しているのか。

（教育政策課長）

第１陣を派遣するにあたって、報道発表している。新聞・テレビ等で取り上げていただいた。日時は未定だが、来週中に第１陣が任務を終えて岡山に帰ってくるので、どのような支援をしたのか、もし岡山県で災害があった場合、何が必要と感じたか等を報告する場として教育長への報告会を予定している。

報告会も報道に発表し、この活動を広く周知してまいりたい。

（委員）

第２陣は、第１陣とは異なる学校に派遣され、学校再開の支援をする予定と説明されたが、第１陣は実際にはどのような仕事をしているのか。

（教育政策課長）

第１陣は、避難所運営の支援が主な仕事であると報告を受けている。第１陣が支援に入った２校は、避難所として大勢の方が避難されており、なかなか学校の再開は難しい状態である。避難所運営の支援のほかに、学校が再開された場合の通学路の安全確保、避難所に避難している児童生徒の心のケアもしていると聞いている。

（委員）

輪島市の中学生の２次避難について、知っていれば教えてもらいたいが、児童生徒は、宿泊施設に泊まり、宿泊施設の近隣の学校に通学することになるのか。

（教育政策課長）

輪島市の児童生徒が、県内の白山市に２次避難することが報道発表されている。

児童生徒は社会教育施設の宿泊施設に泊まると聞いている。

（委員）

中学校の教員も一緒に白山市の学校に勤務するのか。

（教育政策課長）

派遣している七尾市では、教員自身も被災されている方が相当おられると聞いている。

詳細な輪島市の対応については、把握していない。

（教育長）

災害時学校支援チームも研修は行っているが、あくまで机上である。実際に対応する中でしか学べないことがたくさんあり、派遣した職員のスキルが向上し帰ってくると思っている。できる限りの支援をしていきたい。

報告事項（２）高校生国際会議の開催について

〇高校教育課長より一括説明

（委員）

定員の５０人は、高校生の定員か。

（高校教育課長）

そのとおりである。

（委員）

既に定員は埋まっているのか。

（高校教育課長）

今日現在３０名の応募がある。定員まで余裕があるが、開催が近づくにつれて参加者が増えてきている。

（委員）

実行委員会は何人いるのか。

（高校教育課長）

実行委員も約３０名である。先ほど説明をしたが、拠点校の岡山操山高校と９校の連携校の生徒に参加を募ると、３０名の応募があった。これまでに５回の実行委員会を開催している。明日、最終打ち合わせを行う予定になっている。

会議当日は、生徒がグループに分かれてラウンドテーブルを行い、テーマである Well-being をめぐり、様々な議論を交わす予定である。

（委員）

国の指定事業は今年度で最後であるが、次年度以降はどのような事業につなげていくのか。

（高校教育課長）

国の指定事業としては今年度で終了するが、学校の垣根を超えた学びの場を創出していきたいと考えている。昨年度まではコロナ禍もあり、実際には３年前に思い描いたとおりの取組みができていない部分もあるが、実行委員の高校生の生き生きした姿を見ると、こういう場は必要だと考えている。

来年度以降もこうした学びの場を開催するために予算要求をさせていただいたところだ。

（委員）

今年度実行委員会の活動は年５回程度だが、来年度も同等程度を予定しているのか。

（高校教育課長）

来年度も国際会議を開催するかは現段階では決まっていないが、定期的に高校生が集まって、主体的に様々なイベントを企画していくことは効果があると思っている。来年度も定期的に生徒が集まり、学ぶ機会は設定したいと考えている。

（教育長）

学校の枠を超えた取組みは必要だと従前から考えており、主体性を育む上で欠かせないと思っている。そうした学びの延長線上に One Young World への県立高校生の派遣があり、国際会議でまとめた生徒の総意を、派遣生徒が携えて、世界に発信していくとともに、参加した生徒が帰国し、自らが学んだことや、現地でもらった意見などをフィードバックできればと考えている。

（委員）

すごく良い取組みだと思うが、オンラインによる開催はできないのか。特に県北の生徒は参加しようと思っても、移動が大変ではないか。

（高校教育課長）

今年度は、基本は参集でと考えている。連携校の海外姉妹校はオンラインで協議に参加予定である。

（委員）

海外姉妹校がオンライン参加できるのであれば、県内の高校生も可能ではないか。

（高校教育課長）

アカウントの数やグループの設定等の環境面が可能か確認したい。また、明日開催される実行委員会で生徒にも投げかけてみたい。

様子を外から傍聴するだけでも勉強になることはあると思う。こういう取組みを広めていきたいという思いがあるので検討したい。

（委員）

県北の生徒にも平等に機会を与えてもらいたい。

（委員）

当日の様子は録画などするのか。

（高校教育課長）

基調講演から記録する予定にしているが、グループに分かれての協議の部分については困難かと思う。しかし、記録して後日視聴できるようにする予定である。

（委員）

ジグマ王女は岡山大学の名誉博士号を取られているが、岡山在住なのか。

（高校教育課長）

岡山在住ではない。現状を申し上げると、世界中を飛び回られている。岡山大学との繋がりは、非常に深く、今回の基調講演も岡山大学との繋がりから実現した。

（教育長）

昨年知事への表敬訪問があり、私のところにも来ていただきお話しした。非常に気さくな方で岡山にまた来ますと言っていただいたが、基調講演という形で実現していただき、大変感謝している。

当日高校生に対してメッセージを送っていただけることをありがたいと思っている。

（委員）

大変素晴らしいことだと思うので、１人でも多くの方が発言できなくても聴講できるようにしてもらいたい。

（委員）

最近企業ではウェルビーイングという言葉はよく使われるが、高校生にも馴染みあるものなのか。

（高校教育課長）

“Well-being” というテーマは、「WWL コンソーシアム構築支援事業」を国に申請する時点で、拠点校の岡山操山高校が中心となって考えた。当時はまだウェルビーイングという言葉は広く浸透していない状況だったが、世界の状況等を見ながら、これからの世界にとって重要なキーワードであると考え、この言葉をテーマとして取り組みを進めてきた。徐々に学校へも浸透してきて、実行委員の高校生からも、「自分のウェルビーイングやみんなのウェルビーイングのために何が必要か」といった発言がみられるようになっている。

ウェルビーイングという言葉は、人によって捉え方が違ってくる言葉であるがそうであるからこそ、多くの人が幸せな状況になるために自分たちに何ができるのかと考える高校生は増えている。

（委員）

この会議について、実行委員会に参加している学校には認知されていると思うが、実行委員会に参加していない学校にはどの程度認知されているのか。

（高校教育課長）

どの程度認知されているかは把握していない。学校には国際会議があることは、実行委員会に関係なく、周知するよう伝えている。参加希望がある生徒の多くは連携校が多いが、実行委員会の生徒がＳＮＳ等で友達に対しての呼びかけていることも大変効果があると感じている。当初、県立高校の生徒をターゲットに実施することを想定していたが、実際には私立高校の生徒からの申込みがあるなど高校生同士のネットワークから参加者が出てきている部分がある。連携校以外の県立高校にも再度このようなイベントについて周知するよう伝えてまいりたい。

（委員）

高校生向けの色々なイベントがあるが、学校にどれだけ趣旨が伝わっているのか。高校生対象と言いながら、教員がこういったイベントに対してどれだけ認識しているのかということが重要ではないか。

（高校教育課長）

教員の意識は大切だと感じている。

学校の垣根を超えたハイレベルな取組みと聞いた段階で、教員が自校の生徒には難しいと考えてしまうようなことがあるならば改善が必要だと思う。

現状では、高校生への情報提供が、学校を経由し、教員を経由し、ようやく生徒に情報が届くという流れだが、働き方改革という観点からも、ダイレクトに高校生にイベントの情報やコンテストの情報が伝わるような仕組みを検討しているところだ。

以下、非公開のため省略

閉会